千里ニュータウンの公園緑地に内在する自然環境の構造とその発現形態

Structure of Natural Environment Integrated into Spatial Organization of Parks and Open Spaces in Senri New Town

篠沢 健太* 宮城 俊作** 根本 哲夫***

Kenta SHINOZAWA Syunsaku MIYAGI Tetsuo NEMOTO

Abstract : Primary purpose of this research is to show how the regional structure of natural environment was integrated into the planning and design of parks and green spaces in the process of suburban new town developed in a hilly topographical area. The following studies were made for parks and green spaces in Senri New Town located in city of Suita and Toyonaka of Osaka Prefecture; (1) how the location and functional zoning of large parks and green spaces are related to structure of natural environment by examining a series of articles and documents prepared through the development process, (2) how the condition of natural environment affected design and planning of regional parks and neighborhood parks in residential area by comparing original drawings of park plan and topographical maps with those in the present time. Among the findings, in particular, it was noted that natural vegetation areas on the hillside slope and irrigation ponds preserved in the developed areas critically affected space composition of the parks. Design and planning of parks were implemented through adaptable process to change size of park facilities and relocate some functional spaces to other parks and green spaces in order to enhance the effects of natural environment on the site.

Keywords: open space, irrigation pond, playground, Natural Vegetation Area, Senri Newtown, Osaka Regional Plan

キーワード: 公園緑地, ため池, グラウンド, 自然植生地, 千里ニュータウン, 大阪地方計画

1. はじめに

高度経済成長期, 都市郊外丘陵地に開発されたニュータウンの公園緑地は, 現在, 地域の景観の骨格となるまでに成熟している。ニュータウンの公園緑地計画の特徴やそれらが現在有していると思われる地域の潜在的な自然環境構造については, 多摩ニュータウン, 港北ニュータウンなどにおいて議論されてきた^{1), 2)}が, 初期のニュータウン開発において公園緑地計画がどのように進められ, 結果として公園緑地と自然環境構造との間にどのような関係が築かれてきたかについてはあまり検討されてこなかった。

千里ニュータウンの開発においては, 谷の地形単位が諸計画の基礎となっていること³⁾や, 造成・道路・雨水排水計画が相互に影響した結果, 公園緑地のなかに地域の自然環境構造が保全されていることが明らかになっている⁴⁾。しかし, 当時の公園配置・整備計画や設計において自然環境構造がどう意識され, 取り扱われたのか, またそれらが結果として現在の公園緑地のなかにどのようなかたちで残されているかについては検討されていない。

そこで本論では, 当時の図書・図面を用いてその計画過程をトレースし, 千里ニュータウン計画時における公園緑地計画の考え方を整理するとともに, 現在いかなるかたちで都市公園内に地域の自然環境を見いだすことが出来るのか, より詳細な検討を行った。こうした自然環境構造の把握に基づいた公園緑地系統の考え方は単に公園緑地の再整備のみでなく, 周辺の集合住宅団地の建替における公園緑地の整備への指針, さらに住区, ニュータウン, 地域の公園緑地計画のあり方への示唆を含み, 造園・ランドスケープ分野での今日的かつ緊急性のある議論であると考えた。

2. 対象と方法

千里ニュータウン(以下千里NTと記す)の公園緑地の計画設計と土地の自然環境構造との関連について, 2つの点から整理した。

総合公園など大規模な都市公園と都市緑地については, 昭和30年代から40年代に大阪府建築部, 企業局が委託発注して行わ

れた公園緑地に関する調査報告の内容を整理し, 当時のNTと都市圏や周辺市街地との関係, NT全域を見据えた公園緑地の固有の機能と立地特性との関係, 考え方について検討した。とくに現在千里NTにある3つの総合公園(千里北, 中央, 南公園)について, 報告書の中での配置がどのように変化したかを追った。

一方, 住区基幹公園については, とくにNTの自然環境構造と関連が深いと考えられる近隣・地区公園について, その立地と計画内容, 施設整備の特徴を整理した。児童公園や児童遊園, プレイロットについては, 住棟や造成地形との関連が強いため, 公園種別が変更された特殊なものを除き, 本論では扱わなかった。

近隣・地区公園の整備内容については, 昭和46年に大阪府企業局が作成した『千里ニュータウン都市計画公園完成図総集』⁵⁾(以下, 『完成図総集』と記す)を参照した。千里ニュータウンの完成に伴って, 昭和47年4月にNT内の都市公園の管轄が大阪府企業局から吹田・豊中市に移管されており, 『完成図総集』はこの当時の公園の状況を示していると考えられる。この『完成図総集』に記載されている公園整備項目を調べるとともに, 千里NTの公園整備の特徴を表すと考えられる, 「ため池」「自然植生地」⁶⁾「グラウンド」「遊具広場」の4つの公園施設それぞれが各公園に占める面積を計測し, 公園整備の内容を比較した。また昭和60年頃より吹田・豊中市がそれぞれ公園台帳の作成を開始しており, 現在の公園整備についてはこれを参照した⁷⁾。

また公園整備内容と整備に影響した自然環境構造の特性を検討するために, 公園と周辺地域の2時点の地形図を比較した。昭和36年に大阪府が作成した1:3,000地形図と現在の1:2,500地形図を比較し, 尾根・谷の変化, ため池の保全, 改変, かつての樹林地と「自然植生地」との関連を追った。

さらに, とくにNT完成後に公園種別の変更や顕著な利用形態の変化が生じた公園について調査した。これらには, 千里NTの公園のみでなく, NTの周辺緑地の一部が公園的に利用されているもの, 周辺緑地と隣接した市街地の都市公園も含んでいる。

*大阪芸術大学芸術学部環境デザイン学科 **奈良女子大学生活環境学部 ***株式会社日建設計ランドスケープ設計室

3. 千里ニュータウンの公園緑地計画の変遷

(1) 大阪府委託による公園緑地に関する調査報告

昭和34年4月、日本建築学会⁸⁾、日本都市計画学会⁹⁾による千里丘陵の開発に関する2つの委託調査研究が報告された。翌35年から44年までに公園緑地に関する4つの報告書が提出された。

昭和35年2月報告の『都市風景造成ならびに社会緑地の地域構成に関する調査研究』¹⁰⁾(大阪府建築部住宅計画課、主任研究者横山光雄；以下、横山報告と記す)では、(1)新しい計画基準としての「緑地」の分類、種別の検討、(2)英国の新都市建設を参考とした都市景観構成技法の整理、(3)植栽材料の需給が検討された。

昭和35年11月報告の『千里丘陵住宅地区における公園緑地整備計画に関する研究』¹¹⁾(大阪府企業局宅地開発部、研究担当者内山正雄・塩島大ほか；以下、内山・塩島報告と記す)では、(1)千里丘陵住宅地区開発時事業の概要、(2)公園緑地整備の基本方針、(3)南地区における周辺緑地、公園の基本方針が検討された。特に児童、近隣、大公園のそれぞれについて、設計の基本理念といえる基本方針が明記されている。

昭和37年、大阪府企業局委託による『千里丘陵住宅地区における都市計画公園の調査研究』¹²⁾(千里丘陵公園計画研究会、委員長本間啓；以下、本間報告と記す)では、(1)最近の住宅地開発における大規模公園の配置に関する基本方針、(2)大規模公園における標準的な機能配置について、(3)千里北公園と千里中央公園の設計が記された。

昭和44年12月には、千里NTにおける公園緑地系統について「再検討、改訂、積極的に充実を図る」ために、社団法人日本公園緑地協会が『千里丘陵住宅地区における公園緑地の都市計画策定について』¹³⁾を報告した(以下、公園緑地協会報告と記す)。この報告書では、(1)上位計画からみた千里地区の公園緑地系統、(2)千里NTにおける公園緑地計画の再検討、(3)千里NTにおける公園緑地の管理について、それぞれ整備済の公園緑地への反省も踏まえて報告されている。

(2) 大阪地方計画と千里ニュータウンとの関連

昭和34年の都市計画学会報告書では、千里NT計画地の「南部と服部緑地を連結し」、大阪市域を囲む『環状緑地帯』の一部とする」と記されている¹⁴⁾。南西の服部緑地、北西の箕面公園と連携して、「千里NT自体が大きな緑地」として大阪地方計画における緑地系統の一端を担うことが期待されていた¹⁵⁾。

一方かつては「自然発生的な集落地」が点在していた周辺住宅地において東海道線、阪急宝塚線と幹線道路沿いに市街地が広がり、さらに万博開催後、新御堂筋線、北大阪急行、中央環状線などの交通網が発達したことが拍車をかけ、千里NTは外部からのスプロール開発圧を受け始める¹⁶⁾。千里NTの計画では当初から、市街地のスプロールがNT内に侵入するのを防ぐために、周辺緑地によりNTを囲む意図が示されており¹⁷⁾、市街地の拡大に対して「内外を積極的に隔離する」という目的は達成されていた。しかし一方で周辺緑地は「住民感情の障壁」として敬遠されるような傾向¹⁸⁾にあり、公園緑地協会報告の時点では、緑地は「より公園的な利用スペースとして活用されるべき」とであると結論されるに至っている¹⁹⁾。

(3) 千里ニュータウンの緑地系統と大規模公園の考え方

昭和34年の建築学会報告書では大規模公園は全地域を対象とし、全体で1、2カ所としている²⁰⁾。同時期に報告された都市計画学会報告書では、「大公園は周辺にとり、環状緑地帯の一部とし」、「中央公園は考えない」とする、環状緑地帯と大規模公園の一体化が記されている²¹⁾。また都市計画学会報告書では、大規模公園については他地区との機能分担が注目され、服部緑地に総合運動場が整備されていることから、NT内には総合運動場は「不要である」²²⁾とされ、これらは横山報告でも継承されている²³⁾。

その後、公園整備の基本方針を検討した内山・塩島報告では、より高い水準で公園を整備することを目標に、2つの地区公園(現在の総合公園)と1つの総合公園もしくは自然公園の設置が検討された²⁴⁾。続く本間報告では、大規模公園は「周辺部に環境緑地帯を設け」「この一環となるべく周辺部に配置するが、地区が大規模の場合はその中心部にも考慮すべき」²⁵⁾として、「中央公園」の設置の可能性を示唆している。公園緑地協会報告では、これを受けて「一つの公園をやや機能中心に分割し、三つに分けて、千里北、中央、南に配置したと考えるのが妥当」であるとし²⁶⁾、さらにこれら3つの公園を、各住区ごとの地区公園(現在の区分では、近隣公園)の核と考えるのが適当としている²⁷⁾。

(4) 千里ニュータウンの大規模公園整備の特徴

これらの報告書では、公園の配置と機能についての検討が繰り返されている。その内容についてみると、新しい都市の景観をいかに創出するかについての項目が多く、街並みを構成する街路、緑地の景観整備に重点が置かれていた。大規模公園についても景観面から、「相当規模の切盛を行い、従来の緑地的風景の復旧あるいは新しい人工と自然の調和がとれるまで数年あるいは10数年後の緑化の成果をまたねばならない」ため、「既存の地形、樹木を出来る限り尊重して自然味を残すこと」が記されている²⁸⁾。

大規模公園はまた、NTの都市景観を創出するための植物材料の供給の場としての機能も担っていた。横山報告では1章を「植物材料の需給」に割いて公営圃場の必要性とその適地選定基準を示している²⁹⁾。その候補として広域な耕作地跡をNT建設期間中永続的に維持でき、搬出の容易な大規模公園が適当であるとして、千里北公園に樹木供給圃場が建設された。

一方、公園についての設置基準や基本方針では、地域の自然環境構造をどうとらえ、立地のなかでどのように扱うかについての議論は十分示されておらず、それらは個々の公園の計画設計に委ねられていたと考えられる。

4. 千里ニュータウンの近隣・地区公園の特徴

(1) 公園施設からみた千里ニュータウンの近隣・地区公園

『完成図総集』に示された「ため池」「自然植生地」「グラウンド」「遊具広場」の各公園に占める面積割合から、千里NTの近隣・地区公園群は、ため池の有無により大きく2つに分けられ、さらに異なる特徴をもつ6つのタイプに分けられた(表-1)。

ため池が保全されている公園は、(a)自然植生地、グラウンドと遊具広場をもつ公園、(b)自然植生地と遊具広場をもつ公園、(c)ため池のみか、ため池と自然植生地のみでその他の施設がない公園に分けられる。一方ため池が保全されていないか、元々ない公園では、(d)自然植生地とグラウンド、遊具広場がある公園、(e)自然植生地と遊具広場がある公園、(f)自然植生地がなくグラウンドと遊具広場がある公園にわけられた。

表-1 千里ニュータウンの近隣・地区公園の整備内容

名称	現状面積 (ha)	整備内容				ため池名称
		ため池/池 IP/P	自然植生地 NV	遊具広場 PG	グラウンド GR	
千里東町公園	8.2	0.38	2.14	*	0.50	長谷池
桜ノ木公園	5.3	2.14	1.11	0.07		桜ノ木池
藤白公園	2.3	0.61	0.23	0.16		ピアノ池 ²¹⁾
横山公園	6.0	2.20	0.82			春日池
佐竹公園	3.1	1.10				曹達池
千里南町公園	2.5	-	0.31	0.08	0.33	切木ヶ池
津雲公園	3.0	-	0.92	0.25	0.64	名称不明
ねむのき公園	1.2	-	0.18	0.06	0.29	名称不明
千里北町公園	2.8	-	0.19	**	1.15	下池
高野公園	2.7	-	0.09	0.10	***	
千里西町公園	2.0	-	0.18	0.21		
くちなし公園	1.7	-	1.04	0.22		
竹見公園	2.0	-		0.12	0.48	
青山公園	2.7	-		0.14	0.42	名称不明
古江公園	3.0	-		0.09	0.14	

図例: 埋め立てられたため池 * 砂場のみ広場 ** グラウンドの周囲に遊具を配置 *** プールあり

（２）近隣・地区公園の立地特性

整備前に存在していた尾根・谷との関係から（図－１～１３³⁰⁾），公園敷地は（１）分岐尾根型，（２）尾根－谷戸型，（３）谷合流点型，（４）斜面－低地型の４つに分類できた（図－１４）。（１）分岐尾根型は，尾根頂上部から異なる方向に延びる尾根とその間の開析された谷で構成され，千里東町公園がこれにあたる。（２）尾根－谷戸型は，平行する尾根筋とそれに挟まれる谷で構成され，多くの公園はこれに含まれた。さらに千里西町，竹見公園のように尾根主体の公園，樫ノ木，津雲，千里南町公園のように尾根と谷の両者を含む公園，千里北町，高野公園のように谷主体の公園に分けられる。（３）谷合流点型は，枝分かれする谷と周囲から集まる尾根端部で構成され，佐竹，桃山公園がこれにあたる。（４）斜面－低地型は，尾根斜面と河川・水路沿いの沖積低地から構成され，山田川に沿った藤白，古江公園がこれにあたる。

（３）敷地の自然環境構造と公園整備の関連

分岐尾根型の千里東町公園は計画面積が広く，施設を全て含んでいた。これに比べ尾根－谷戸型で尾根主体の青山，竹見公園では自然植生地がなく，千里西町公園では自然植生地の面積は狭かった。一方，尾根－谷戸型公園のうち，尾根と谷の両者を含む公園と谷主体の公園では，自然植生地，グラウンド，遊具広場が整備されていた。これらの公園では千里北町公園のように谷戸奥部や谷頭の小規模なため池と周囲の水田を埋め立てて作られた運動施設やグラウンドが特徴的であった。この「ため池グラウンド」は（１）周囲に斜面樹林を残す場合が多く，（２）高さの異なる広場・グラウンドが隣接して多段状にあるなどの形態的特徴をもっている。佐竹，桃山公園などの谷合流点型の公園では広い面積のため池が保全され，グラウンドや遊具広場などの機能が確保されていない。周囲から張り出した尾根の先端部分のみが「自然植生地」として保全されるか，「自然植生地」が全くなかった。斜面－低地型公園では，低地を流れる河川が雨水排水幹線となり，造成のベンチマークとなっていた。そのため藤白，古江公園の低地部分は造成されず，ともに斜面が一部造成されていた。また藤白公園では，河川沿いの調整池が公園に組み込まれていた³¹⁾。

５．考察

（１）公園緑地の整備内容と自然環境構造との関係

起伏に富む丘陵地に効率的に住宅地を開発する上で，尾根・谷の変換点が公園整備の対象となるのは必然的であった。その起伏のなかで公園緑地はかつての地形，植生とため池を保全しつつ，地形に応じた機能を確保してきた。

（２）ため池の保全と機能分担

千里 NT の近隣・地区公園整備の特徴の一つに，ため池の保全・利活用がある。計画当時からため池を保全し，水面を公園利用することが一般的には「一つの賢明な策であり，風致上優れた景観を醸成する一助になることは確か」³²⁾であるとされていたが，同時に実際には公園機能が不足することが指摘されている³³⁾。特に運動施設，グラウンド，野球場の不足が指摘されており，他の公園と機能分担するべきであると指摘されている。

分析の結果，グラウンドをもたない公園は，ため池を保全した多くの公園群や，尾根－谷戸型（尾根主体）公園の一部で，ことに谷合流点型の公園で認められた。そうした運動施設の住区内での不足を解消するためには，ある程度の広さをもつ平坦な土地が必要であり，そのために選ばれた千里北町公園，ねむのき公園は尾根－谷戸型（谷主体）の立地であった。

（３）「自然植生地」の保全と公園整備

「自然植生地」として公園に保全された樹林は，かつての樹林地に比べると面積的にはわずかであった。斜面の一部を保全したことにより造成範囲が限定されたが，公園毎に保全された「自然

植生地」の面積には差があった。このため，ため池に比べて公園機能への影響は少なく，斜面に沿った湾曲した園路やグラウンドを囲む緑など，立地の地形的な骨格を大きく変化させない公園整備を導いた。

６．千里ニュータウンの公園緑地整備の今日的課題

（１）公園の利用機能と緑地の存在価値

公園緑地協会報告では，公園緑地計画の機能のうち利用価値については「公園」が，存在価値については「緑地」がそれを担うと考えられていた³⁴⁾。公園緑地とも計画設計の内容は「計画当初は原地形をみたといえ，いわば机上プラン的な面が強く」，NT 建設開始後 10 年経過した段階で「種々の事情が変化してきている関係上…（中略）…実態にそぐわない」ことが指摘され，公園については，「利用価値の全くない部分が造成不可能のまま残されている」との指摘があった³⁵⁾。

公園の利用価値と存在価値を，それぞれ空間利用と自然環境構造ととらえ直して考えた場合，空間利用主導の計画論では「空間利用→必要な空間の確保→自然環境構造の改変」という計画過程を経る。住区基幹公園では空間利用が率先して考えられることが多く，住区基幹公園における公園緑地の配置は，住民に広く等質なサービスを提供することを意図していた。そのため，新たに開発された住宅地などでは誘致圏を考慮して公園配置が検討され，結果として均等に配置された公園が等密度に分布する景観が形成される傾向がある。しかしグラウンドや野球場，体育館など，空間利用は必ずしも公園でなくても，単独で成立しうる。

千里 NT では，道路・排水・造成計画がため池や「自然植生地」という自然環境構造を「存在価値」として近隣・地区公園に付与し，「自然環境構造→それに見合った空間利用→機能分担あるいは機能の縮小」という流れで計画が進められたと考えられる。

この公園緑地の空間利用と存在価値の関係は，大阪都市圏と大阪環状緑地帯，千里 NT と周辺緑地，住区と公園緑地，グラウンドと自然植生地など，異なるスケールでも存在している。空間利用の要請と存在価値の保全・創出からなる，公園緑地計画の入れ子構造，フラクタル性ともいえるものが，千里 NT の公園緑地計画には垣間みられた。

（２）公園緑地の保全と継承

（i）公園緑地を「繋ぐ」意味

吹田市では，個々の住区ごとに「千里ニュータウン再生計画」が策定され，地区計画のなかで公園緑地を継承することが検討されている³⁶⁾。また豊中市では，緑地指定制度による緑地保全計画が行われている。しかしこれらの計画におけるネットワークは歩行者動線であり，公園緑地のもつ存在価値から計画的に繋ぐことは考慮されていない。

水系や尾根筋など公園緑地に内在する地域の自然環境構造を意図し，隣接する集合住宅団地の建替などの際に，それに繋ぐ形で住区内の緑地を配置することは，とくに都市における水循環やビオトープ整備の観点から重要であると思われる。

（ii）「ため池グラウンド」のポテンシャル

雨水排水幹線がかつての谷に位置している千里 NT では，ため池およびため池を埋め立てたグラウンドは雨水排水上で必然的な位置にある。千里 NT の雨水浸透を検討した調査報告では，雨水浸透では切土造成箇所が適当とされている³⁷⁾が，今後，既存の公園に，下流域での都市型水害を軽減するための流出遅延機能や，生態系保全や親水効果のための水辺空間を付与することを考える場合，ため池グラウンドはその適地となるだろう。

（iii）周辺緑地と公園との連携

周辺緑地の公園の利用は当初から想定されており，例えば二ノ切池公園（豊中市）は周辺緑地であるが，昭和 61 年度に温水プー

図－１ 千里東町公園〔分岐尾根型〕の変遷（左；1961年，右；現状；以下，図－2～13も同じ，凡例も共通）

図－2 千里西町公園〔尾根－谷戸型（尾根主体）〕の変遷

図－3 竹見公園〔尾根－谷戸型（尾根主体）〕の変遷

図－4 青山公園〔尾根－谷戸型（尾根主）〕の変遷

図－5 榎ノ木公園〔尾根－谷戸型（尾根＋谷）〕の変遷

図－6 津雲公園〔尾根－谷戸型（尾根＋谷）〕の変遷

図－7 千里南町公園〔尾根－谷戸型（尾根＋谷）〕の変遷

ルなどの施設が整備され，利用機能の充足がはかられている。

一方，千里NTの外部に隣接した山田西公園周辺（吹田市）では，公園と周辺緑地を水系で「繋ぐ」ことにより生態学的に質の高い空間が保全されている。周辺緑地の外周を高町池（山田西池）から名なし池，海老池と連続してため池を保全した結果，大阪府の絶滅危惧種であるベニイトトンボの生育が確認されている^{38）}。

（iv）「自然植生地」と新規植栽地の比較の必要性

生物生態機能の観点からは，公園開設時に保全された「自然植生地」と，新たに植栽された樹林の生態学的な質の相違も明らかにすべき課題である。公園利用の際の自然植栽地への人の侵入，踏圧と表土流出による林床植生への影響により，保全された「自然植生地」は必ずしも当時のままではない。一方，計画時に新規

図-8 千里北町公園〔尾根－谷戸型（谷主体）〕の変遷

図-9 高野公園〔尾根－谷戸型（谷主体）〕の変遷

図-10 ねむのき公園〔尾根－谷戸型（谷主体）；右下〕と佐竹公園〔谷合流点型；左上〕の変遷

図-11 桃山公園〔谷合流点型〕の変遷

図-12 藤白公園〔斜面－低地型〕の変遷

図-13 古江公園〔斜面－低地型〕の変遷

に植栽された樹林は生長し、地域の資産として新たな価値を生み出している。青山、古江公園など、「自然植生地」が保全されていない尾根主体や斜面－低地型の公園などでも、現在、少なくとも景観的には「自然植生地」と遜色ない樹林がみられる。

これはため池についても同様で、保全したため池が現在でもよい状態であるとは限らない。利水目的で保全された多くのため池では水際がコンクリートで固められている。上記のベニイトンボの調査では、保全されたため池よりもかつて調整池であった藤白公園のピアノ池が生態学的な評価が高かった³⁹⁾。これは池の水辺を護岸整備せず、岸に隣接して「自然植生地」を保全したためと考えられる。

7. おわりに

千里ニュータウンを対象に、大都市近郊の丘陵地に開発されたニュータウンの公園緑地における大規模都市公園の計画過程と、

近隣・地区公園の整備とそれに影響を及ぼした自然環境構造との関連について考察した。

図-14 千里 NT の近隣・地区公園の整備と自然環境構造の関係

大規模公園については、当初は周辺緑地との連携で NT 外部への配置が計画されていたが、周辺緑地の位置づけの変化、機能重視から中央公園を含む 3 公園配置に変化した流れが確認できた。

また近隣・地区公園には地域の自然環境構造が内在し、とくに開発時に斜面とともに保全された「自然植生地」と「ため池」が公園整備に影響を及ぼし、立地の自然環境構造に応じて施設規模が変化し、他の公園と機能分担していることが明らかとなった。

現在の NT 再整備計画では、地域の自然環境構造を考慮した公園緑地系統の概念は希薄であり、個々の公園緑地の扱いはそれぞれの計画に依存している。集合住宅の建て替えや公園緑地の再編に伴って、地域の自然環境構造を継承する公園緑地計画の全体コンセプトを早急に再編成することが必要であると思われる。これは同時に、少子高齢化を迎え、今後数十年かけて縮退していくであろう都市の将来像を考える一助となるであろう。

なお公園と隣接する学校等周辺施設、斜面緑地、歩行者専用道と公園の整備内容との関連や、市民参加による樹林管理と公園再生などについては、今後の検討課題である。

謝辞

大阪府公文書館矢切努氏には大阪府企業局関連の資料の収集にあたり、吹田市緑化公園室の皆さま、豊中市環境部公園みどり推進課の皆さまには、資料収集と公園整備・管理についてのヒアリングにあたり大変お世話になった。また吹田市企画部千里再生室の古川鉄人参事には、千里ニュータウン再生計画についてお話を伺った。さらに元大阪府の山地英雄氏には、ニュータウン開発に直接携わった立場からの貴重なお話と本研究に対するご指導をいただいた。ここに記して感謝の意を表するしだいである。なお本研究は独立行政法人日本学術振興会平成 18 年度科学研究費基盤研究 C 課題番号 18580024「自然環境の基盤的構造を活性化するニュータウン再生モデルの構築」(研究代表者：宮城俊作)に基づいている。

補注および参考引用文献

- 1) 宮城俊作 (1996) : 地域環境構造を内化する集合住宅地のオープンスペース計画—多摩ニュータウン・稲城長峰地区のケーススタディー : 日本都市計画学会学術論文集 31, 91-96
- 2) 木下剛・宮城俊作 (1998) : 港北ニュータウンのオープンスペースシステム形成過程における公園緑地の位置づけ : ランドスケープ研究 61(5), 721-726
- 3) 篠沢健太・宮城俊作・根本哲夫 (2006) : 千里丘陵の開発における地形の取り扱いと自然環境の構造 : ランドスケープ研究 69(5), 817-822

- 4) 篠沢健太・宮城俊作・根本哲夫 (2007) : 千里ニュータウンにおける集水域の構造変容と公園緑地系統の関連 : ランドスケープ研究 70(5), 647-652
- 5) 大阪府企業局 (1971) : 千里ニュータウン都市計画公園完成図総集, 96 pp.
- 6) 斜面とともに残された既存樹木は、『図面総集』では「自然植生地」として記載されている。これは厳密な意味での自然植生ではなく、かつての樹林を保全したもので、雑木林や竹林も「自然植生地」として扱われる。
- 7) 一部の公園については現時点で公園台帳の整備が終了しておらず、その場合は 1 : 500 地形図を元に現地調査を行い、整備内容の変化を確認した。
- 8) 日本建築学会 (1959) : 丘陵地帯における住宅都市建設のための住区及び住宅の計画及び設計に関する研究 : 大阪府企業局宅地開発部委託研究 2.5 公園、遊び場, 73-95
- 9) 日本都市計画学会 (1959) : 地方計画に基づく近郊都市建設基準に関する研究 第 4 章 公園緑地計画 : 大阪府企業局宅地開発部委託研究, 233 pp.
- 10) 大阪府建築部住宅計画課 (1960) : 都市風景造成ならびに社会緑地の地域構成に関する調査研究 (主任研究者 横山光雄), 104 pp.
- 11) 大阪府企業局宅地開発部 (1960) : 千里丘陵住宅地区における公園緑地整備計画に関する研究 (研究担当者 内山正雄・塩島大ほか), 44 pp.
- 12) 大阪府企業局 (1962) : 千里丘陵住宅地区における都市計画公園の調査研究 (千里丘陵公園計画研究会 委員長 本間啓), 57 pp.
- 13) 社団法人日本公園緑地協会 (1969) : 千里丘陵住宅地区における公園緑地の都市計画策定について, 21 pp.
- 14) 前掲書 9), 211 p.
- 15) 前掲書 13), 2-4.
- 16) 前掲書 13), 5-9.
- 17) 前掲書 9), 211-212.
- 18) 前掲書 13), 9 p.
- 19) 前掲書 13), 18 p.
- 20) 前掲書 8), 67 p.
- 21) 前掲書 9), 212 p.
- 22) 前掲書 9), 211 p.
- 23) 前掲書 10), 18 p.
- 24) 前掲書 11), 16 p.
- 25) 前掲書 12), 11 p.
- 26) 前掲書 13), 14 p.
- 27) 前掲書 13), 5 p.
- 28) 前掲書 11), 33 p.
- 29) 前掲書 10), 91-103.
- 30) 紙面の都合上、くちなし公園のみ図の掲載を割愛した。
- 31) 大阪府企業局 (1970) : 千里ニュータウンの建設 : 191 p には「蓮間ヶ池、菩提池、牛ヶ首池を除き、他の遊水池は 44 年までに全て埋め立てられる」とあるが、藤白公園のピアノ池は山田川第 1 遊水池が埋め立てられずに残り、公園整備されていた。
- 32) 前掲書 11), 16 p.
- 33) 前掲書 11), 43 p.
- 34) 前掲書 13), 15 p.
- 35) 前掲書 13), 15-17.
- 36) 吹田市 (2005) : 千里ニュータウン再生ビジョン推進事業, 68 pp および、吹田市 (2006) : 千里ニュータウン再生ビジョン推進事業 II—住区再生プランナー, 71 pp.
- 37) 国土交通省住宅局 (2004) : 居住者ニーズの変化に対応したニュータウンの再活性化方策検討調査 (千里ニュータウン) 報告書 6 章 環境に配慮した水環境システムの検討, 70-74. および、調査を担当した吹田市のヒアリングによる。
- 38) 吹田自然観察会 (2007) : 吹田ベニトトンボ調査 (ため池の環境と生物) in 社団法人大阪自然環境保全協会 (2007) : ネイチャーおおさかスタディーファイル No.1, 26-85
- 39) 前掲書 38), 53 p.